

2023年7月 久留米市災害ボランティアセンター救護班活動報告

NPO 法人日本ホスピス・在宅ケア研究会 被災者支援ネットワーク

報告者：新路理香 石口房子

- (1) 活動場所：久留米市災害ボランティアセンター 東部サテライト（久留米ふれあい農業公園）  
(2) 活動期間：7月18日（火）～9月16日（土）※8月8～10日は台風6号のため活動中止  
(3) 目的：災害ボランティアセンター（以降、災害ボラセン）において二次被害者を出さない  
(4) 活動内容

- ①災害ボランティアの健康観察、熱中症予防、感染予防、怪我予防の注意喚起、怪我応急処置  
体調不良者の対応、医療機関への連絡、受診判断、新型コロナウイルス対策、記録等  
②被災地の巡回支援：被災住民の聞き取り、健康相談、メンタルケア、記録等  
③東部サテライトスタッフ、外部スタッフとの協働、健康観察支援等

## (5) 救護対応者内訳

- ・熱中症 33名（内 救急車搬送4名 入院1名）
- ・創傷処置 16名（蜂刺され 4名、虫さされ3名、釘切傷 2名、手切傷 2名、爪処置 1名  
釘踏み抜き 1名、足打撲 1名、手打撲 1名、脇打撲 1名）
- ・被災地住民対応 3名（外国人で日本語不可 心疾患1名、メンタルケア1名、受診促進1名）

※ 災害ボランティアの参加人数は、1日平均約200人（最高360人）

- (6) 救護活動看護師等：実数 90名 延べ 197名 （看護学生 13名、認定臨床宗教師 1名）  
(7) 救護班1日の主なスケジュール

8:30～9:00 全体ミーティング 初参加看護師へオリエンテーション 救護物品準備  
9:00～ ボランティアの送り出し準備 声掛け、特に熱中症予防（初期症状の伝達、水分  
塩飴の配布等）、怪我注意喚起、伝達事項、健康チェック ⇒ 送り出し  
※7月22日～27日まで社協給水班と共に被災地を巡回  
10:00～ 駐車場ラウンド 熱中症対策 氷水タオルや水分配布、健康観察、他部門の支援  
12:00～15:00 ボランティア活動終了者帰着 声掛け、健康観察、体調不良者等の対応  
物品整理、資料作成、記録等  
15:30～ 終礼 解散

## (8) 被災地の巡回支援：被災住民の聞き取り・健康相談・メンタルケア・記録

＜実際＞ 7月22日～27日まで社会福祉協議会（以降、社協）給水班に救護看護師1名が同乗し  
被災地を巡回する。災害ボランティア活動場所に配水巡回であり、救護看護師が聞き取りを行う時  
間はなかった。以降は巡回ニーズ調査も兼ねるため、救護看護師の巡回は終了となる。

被災住民の体調不良等は、都度救護に連絡があり、社協スタッフの車に同乗し3件対応した。

＜課題＞ 子ども・独居・高齢者・日本語の話せない外国の方・障がいのある方の情報収集、対応、  
他部門との連携が必要となる。地域での看護師を含めたネットワークの構築が重要と感じた。

## (9) 救護班の災害ボラセンにて、社協・外部スタッフとの協働

- ①社協により「救護所」の看板・「救護対象者 対応一覧」の用紙も作成。  
②周囲へ救護看護師の存在を知ってもらうため、ピブスに看護師ゼッケン貼付して着用した。  
③周囲の環境整備・必要物品の不足を社協へ依頼（生理用品・爪切り・毛抜き・カットバン

スリッパ・ OS-1 水等 ) ポイズンリムーバーは浜本氏 (広島) より支援あり。

- ④新型コロナウイルス疑いが認められた場合の対応について、三橋氏とともに検査基準・対応を社協と相談し、三橋氏より検査キットの提供を受ける。市役所管理にてふれあい農業公園管理棟内に、災害ボランティアが宿泊可能となる。感染対策について市職員と三橋氏とともに相談。団体宿泊等感染について困れば三橋氏と相談となるが、感染者なく経過した。
- ⑤災害ボランティア出発後は、支援スタッフへの声かけ・体調観察・駐車場係へ氷タオルや給水を継続した。
- ⑥活動前の「看護師からお願い」について、A3 サイズラミネートまたブランケット判に拡大し活動前の注意喚起オリエンテーション (以降、オリ) 実施。マッチング前の救護からのオリはルーチンとなった。オリ経験看護師が実施し、初参加看護師は見学後に実施していた。その後宮原看護師により、初参加看護師も統一して実施できるよう、ラミネートパンフレット (安全な作業のために・チャドク蛾・イラ蛾の写真付き注意解説・熱中症となりやすい傾向) が作成され活用した。災害ボランティアの方はとくに熱心に聞いており、ケガは現場で洗浄でき熱中症症状時はグループで気を付けていた。体調不良者は救護に連絡があり現場へ行き対応、または帰着を促し救護所で対応した。救急車搬送は4件で入院1件であったが退院され重篤者はいなかった。
- ⑦OS-1 飲料は高血圧・腎障害・糖尿病患者への適応注意もあり、配布飲料には入れず救護管理として体調を観察し飲水勧めた。スポーツドリンク・塩タブレット・塩飴は準備があった。
- ⑧サテライトでは物品も潤沢ではない。物品は支援物資、社協購入であり、必要物品は相談して購入依頼し、また不要な配布をしないよう心掛けた。

#### (10) 他組織との連携広報

久留米市社会福祉協議会 Kurume-shi Fukuoka Facebook 7/25 8/5 に掲載あり

久留米市社旗福祉協議会 災害ボランティア情報「めぐるくるめ」 7/26 救護班の掲載あり

#### (11) 救護看護師の連携方法

- ①8月19日より ネットワークの拡大に伴いリアルタイムでの情報共有が必要となり X (旧 Twitter) にて、救護班グループラインを設定した。  
参加者の確認、引継ぎを写真付きで行う等情報共有に有効であった。
- ②救急対応は各看護師にとり緊張感・不安があり、またアンダートリアージのないように、応急対応は2名で行った。
- ③ポイズンリムーバー使用法は、看護師同士で活動時説明し各自習得した。
- ④参加者管理を石口が実施し、継続した活動が実施できた。  
同じ看護師が連続常駐することで引継ぎはスムーズであったが、今後、看護師の日替わり参加が続く場合は、事務局をつくり管理を行うことが必要となるだろう。

#### (12) 看護師の派遣又は参加ルート

- ①日本ホスピス・在宅ケア研究会 被災者支援ネットワーク (以降、日ホス支援ネット) (担当: 石口)
- ②三橋睦子氏 (久留米市在中 国際医療福祉大学 大川キャンパス)
- ③福岡県民主医療機関連合会 (福岡・佐賀民医連 担当: 伊藤絹江氏)
- ④福岡市内の訪問看護ステーション・八女筑後医師会介護連携室 (福岡市訪問看護ステーション 連絡協議会 担当: 平野頼子氏)
- ⑤福岡県看護協会 (ボランティア看護師 担当: 大和田美子会長)
- ⑥久留米市社協職員 (馬見塚幸子氏)
- ⑦災害ボランティアの中から看護師に声掛け
- ⑧知人の紹介

(13) 今後の看護師等連携について

何時発生するか分からない災害等に備え、久留米市在住の三橋睦子氏が中心になり、『久留米危機対応ネットワーク』を結成された。三橋氏は長年、久留米大学医学部看護学科勤務の経歴があり、感染看護、災害看護、成人看護の専門家で、幅広い人脈をもち適任と思われる。

(12) の①日ホスは、『久留米危機対応ネットワーク』等から支援要請があれば協力可能である。

(12) の③福岡・佐賀民医連は、久留米市社協より依頼があれば検討する。

(12) の④は平野氏により、福岡市内で災害時のネットワーク構築希望であるが協力可能である。

(12) の⑤看護協会は、三橋氏からの声掛けで参加したが、今後検討を要するようである。

(14) 久留米市災害ボランティアセンターの救護班活動に至るまでの経過と終了までの経過（簡略）

7/10 久留米市は、未明より記録的な大雨が降り7時34分には河川の水位が上昇したため、全市にレベル5「緊急安全確保」を発令した。広範囲に水害が発生し、特に田主丸では被害が大きく、10人が土砂に巻き込まれ一人死亡が確認された。

7/11 久留米市との協定により久留米市社会福祉協議会（以降、社協）が久留米市災害ボラセンを開設。12日より災害ボランティア募集。13日より災害ボランティアを被災地へ派遣を開始した。

7/13 日本ホスピス・在宅ケア研究会「被災者支援ネットワーク」（以降、日ホス支援ネット）責任者石口理事が社協へ災害ボラセンの救護体制について電話で問い合わせをする。「救護も社協のスタッフが行っており、看護師がいれば助かる」と救護看護師の必要性を認識されていた。救護看護師のニーズを確認し、日ホス支援ネットとして活動の検討を始めるが、社協は福岡県外ボランティア受け入れは不可とのことだった。

14・15日と日ホス平野評議員により社協へ受け入れを打診するが進展なし。

7/17 久留米市在住の国際医療福祉大学の三橋氏が、日ホス支援ネットの窮状を知り社協へ連絡をとると、再度救護看護師の要望があった。三橋氏が県内からだけでは看護師の募集は困難であることを伝えると、社協により専門職は県外でも受け入れ可能となった。これを受けて、日ホス支援ネットの活動開始となる。

7/18 石口氏要請により救護看護師ボランティア新路理香（広島在住）が久留米へ出発。昼前に社協本部を訪問するが、災害ボラセンは多忙であり、救護所設置の対応も困難な状況であった。社協担当者より、“にいがた災害ボランティアネットワーク” 李氏を紹介された。李氏とは、別の被災地で面識があり打合せができた。

＜李氏と問題点の確認＞

①医療チームの支援なし

②久留米ふれあい農業公園(東部サテライト・被害の大きい田主丸地区)に常駐看護師がいない。社協本部（西部サテライト）は建物内で空調もあり救護看護師不要。

③中長期支援となる（2か月は必要）

④被災者の健康管理・メンタルヘルスケアが必要（看護師の巡回検討）

上記により、久留米ふるさと農業公園災害ボランティアセンターに救護所設置を決めた。

三橋氏と電話連絡：今後の活動目標・活動の実施について確認した。

7/19～9月16日まで久留米ふれあい農業公園ボラセン内の飲料配布横のテントへ救護所を開設し救護看護師の常駐を行った。※8月8～10日は台風6号のため全体の活動中止。

7/22 社協職員と三橋氏チームとで被災住民の巡回開始。

救護所確保（簡易ベッドとしてソファ2つを紐で固定）。室内で冷房あり。

災害ボランティアが宿泊可能となる。市役所管理にてふれあい農業公園管理棟内。

- |      |  |
|------|--|
| 7/26 | 災害ボランティア受け入れが、全国からの募集となり災害ボランティア数が増加した。<br>佐賀民医連・福岡医療団から、有光信恵氏が災害ボラセン視察・救護活動について説明、社協担当者と面談され 28 日より派遣開始となる。 |
| 8/26 | 三橋氏が福岡県看護協会大和日美子会長に連絡をとり、看護協会ホームページに“救護ボランティア看護師募集”が掲載された。   |
| 9/16 | 東部災害ボラセンが撤収となり救護班も終了した。<br>以後は、週末等に規模を絞り被災地域や住民への復興支援が継続されている。   |

#### (15) 結果とお礼

この度の救護活動において、重篤な二次被害者を出すことなく終了できました。

多くの組織やボランティア看護師の活動に、心より感謝申し上げます。

記録的な“猛暑”が続き、災害ボランティアの方や看護師も“命がけ”だったと思います。熱中症の予防と、熱中症になっても適切な対処で全員回復されたことが、東部災害ボラセン担当者協働の一番の成果だと言えるでしょう。また、災害ボランティアのオリエ、活動終了後に温泉で長湯やお酒の飲み過ぎによる脱水にも注意を促し、朝食や昼食も摂れるように細かな配慮が行われていることにも感動しました。災害ボランティアの一人ひとりの背景にも目を向けられていたことが、よく伝わってきました。

そして印象的だったのは、災害ボラセンから送られて来る看護師さん達の写真が、どの方も輝いて美しい笑顔だったことです。救われる思いでした。本当にありがとうございました。

この度、結成された『久留米危機対応ネットワーク』は、三橋氏を中心に事務局担当（稲吉氏、宮原氏）、関係者の連携で即実践力のあるネットワークが構築されることを期待しています。

最後に、久留米市社協からは、「救護看護師が常駐していたことで安心でき心強かった」との言葉を送っていただきましたことをお伝えします。

今後とも、よろしくお願いいたします。